



# ミュンヘン公立キンダーガルテンの

## めざす保育

ベルガー有希子

ミュンヘンには、現在、三百近くの公立幼稚園があります。それに加えて、教会立など私立幼稚園も三百か所あります。

少子化と言われて久しいドイツの中（現在ドイツの出生率は、1・3）で、バイエルン州の州都、ミュンヘンは、毎年新しい幼稚園が建設され、それが間に合わないほど子どもが増え続けています。

それは、ミュンヘンが、経済的に恵まれていることに加えて、移民の受け入れに積極的であることが背景にあります。

### 保護者の希望を取り入れるアンケート調査

キンダーガルテンとは、三歳児から六歳児を対象とした全日制の保育施設です。開園時間は、各園によってさまざまですが、朝七時から夕方五時までが一般的です。一クラス25名で、保護者の希望により、午前保育のみ、午後二時まで、あるいは午後五時までと、選択することができます。三クラスある場合には、午前保育、二時まで保育、全日保育と、クラスを分けることもありますが、一般的には、一クラス25名の中に、

三つの異なる降園時間の子どもが集まっています。

さらに、二年前からは、降園時間について改正があり、保育者にとつては複雑に、保護者にとつては便利になりました。

改正前は、お迎えの時間が、十二時お迎えの場合は十一時半から、二時お迎えの場合は一時半というふうな、降園時間の三十分前から、という取り決めがありました。しかし、個々の家庭の事情により、全日保育を選択しているけれども、火曜日は、二時に子どもをお迎えに行きたい、などという希望が増えてきたため、いまでは、コアタイム以外の時間について、曜日によつて保育時間を延長したり、短縮したりできるようなになりました（コアタイムとは、グループ活動や、個々の保育活動がその間に入る時間で、八時から十二時、あるいは、九時から一時までというのが一般的）。つまり改正後には、月曜日は四時に降園し、火曜日は三時に、水曜日は五時というように、曜日によつての保育時間の調整が可能になりました。

このような保護者からの要望は、毎年一回行われる園のアンケート調査によつて行政側の耳に届きます。

アンケートでは、保育環境、保育内容、保育行事、保育者などについての、満足度や、具体的な要望などを無記名で調査します。それをもとに、保育者は、自分たちの保育の何が具体的に評価されていて、何を改善するべきであるかを話し合うことができ、行政は、幼稚園の枠組みや環境についての見直しをすることができます。

保護者からの希望で、改善されたことのほかの例としては、午前中のおやつとの時間と、お昼寝の時間に関してです。以前は、おやつを一齐に食べる園がほとんどでしたが、朝ごはんを食べてこない子どもたちが増えてきたことを考慮して、部屋の中に朝ごはんコーナーをセッティングしておき、食べたい時に、いつでも食べてもいい、という決まりになりました。お昼寝についても、たとえば、以前は三歳なら寝たくない子どもも一緒に横になる、という方針でしたが、

各家庭の都合に合わせて選択できるようになってきています。

また、保育内容についての要望としては「学校前に、文字を教えてほしい」や、「数字を教えてほしい」という、いわゆるお勉強の要素のある保育が望まれるようになってきました。以前は、文字や数字は、学校で習うものであって、幼稚園では扱わない、という一貫したスタンスだったのですが、保護者からの意見に加えて、社会や家庭のあり方の変化により、幼稚園の存在意義がここ十年で変化しているように見受けられます。

### 変わってきたキンダーガルテンの意義

二十年前に、東西ドイツが統一されて以来、東から西に職場を求めて若者が移動したり、マルクがユーロになったりと、変化の多いドイツですが、社会の変化に合わせて、家庭や家族という概念についても、議論されるが多くなりました。

二十年前、いわゆる日本で「三歳児神話」といわれ

るように、ドイツでも、幼稚園に入るまでは母親の手で育てるのが理想的、と思われていました。そして、職場も三年間の育児休暇を保障するところが普通でした。しかし、ここ数年の間に、シングルマザーの増加、経済的な側面などから母親が働かざるを得ない状況にある家庭が増えてきました。それは二〇〇七年から支給されるようになった親手当が、一年間に限られていることもあり、二年目から職場復帰する母親が増えたことも一因となっています。

共働き家族が増えることによって家庭における子育て力が低下した、とは一概には言いきれませんが、子どもが家庭で過ごす時間が短くなっていることや、最近の脳科学の解明によって、幼児期の大切さがクローズアップされていることから、キンダーガルテンでの子どもたちの生活が見直されるようになりました。

どのように見直されたかという点、キンダーガルテンがたんに子どもを子ども同士で遊ばせる場所から、子どもの発達に見合った学びの機会を与える場所へ

と、意義が変わってきたのです。

具体的には、バイエルンでは、二〇〇五年にバイエルン陶冶・保育プランが定められ、乳幼児保育施設における指針となりました。

### バイエルン陶冶・保育プラン（略してBEP）

BEPの原則として、次の四点があげられています。

・ 幼児期の学びは、生涯続いていく学びの姿勢の基礎となる。

・ 保育、学び、見守りは、子どもの発達に見合った形で行われる。

・ いくら幼児保育施設においての学びが強調されることがあっても、教育学的基本としての“遊び”は、大切にされるべきである。

・ 目標とされる学びのプロセスが成功するには、保育者が子どもを見守り、観察する姿勢が必要である。

BEPの中で繰り返し言われていることは、遊びながら学ぶ、という姿勢であり、子どもの中にある発見

する喜びを刺激することによって、学びのプロセスを促していくことです。これまで大切とされていた、子どもの中に、自信と自尊心を育てていく、というような、人格形成的な発達を援助することに加えて、認知的能力、自発的に取り組む能力、また体力を促進することが大事だとされています。

わかりやすくいえば、キンダーガルテンは、居心地のよい場所であるだけではなく、なおかつ、子どもの知的、身体的能力を子どもの発達にあつたやり方で、伸ばす場所であるべきだと書かれています。

そして、保育者の役割としては、子どもたち、つまり小さな冒険者が世の中の不思議や法則を見つけ出し、経験することを援助してあげること、と位置づけられています。そこには、明確に、子どものための保育行為から、子どもと一緒の保育行為へと移り変わるべきであると述べられています。

さらに、BEPでは、具体的な保育領域、内容として六つの領域を重点項目としています。

#### ◆言語力への働きかけ

話すことの楽しさに気づくこと。本読みや、読み聞かせについての楽しさを感じ、語彙を広げたり、会話力を伸ばし、言葉で意見を戦わせたりすることができること。お話を説明する力、および、お話を理解する力をつける。

#### ◆数学的学びの幅を広げる

パズル、積み木やボールなど、おもちゃを通してさまざまな形を五感を通して認識すること。手遊び歌や、ケーキを切り分けることにより、数について認識すること。比較したり、分類したり、整理したりする。重さを量ったり、長さを測ったり、お金について知る。

#### ◆自然科学や、技術的学びの幅を広げる

触ったり、こねたり、息を吹きかけたり、匂いをかいだり、風船を膨らませるといような、五感をつかった刺激を通して、また観察する現象に驚くことによつて、最初の自然科学の不思議へと誘導される。簡単な実験を習ったり、発明したりして、それを観察した

り、評価したりする。簡単な道具の扱い方を習う。生物学の領域としては、葉っぱのような自然物を集めたり、分類したりする。化学や物理学の領域においては、たとえば固体、液体、ガスというような物質の性質についてとりあげる。

#### ◆メディアからの学びとメディア保育

情報コミュニケーション技術の使用、現実とバーチャル世界の違いについて知る。子どもの発達に見合ったメディアとのつき合い方。

#### ◆音楽的学びとメディア保育への働きかけ

聴覚を発達させる。さまざまな楽器や音楽ジャンルを知る。わらべ歌、リズム感の発達。みんなと一緒に歌ったり演奏したりする。音楽で自分の感情を表現する。

#### ◆身体を動かす保育、体育

健康的な身体感情を発達させる。たとえば正しい文法を作るといような特定の知的作業の前提とされる、身体および手先の器用さを養う。自分の能力について自信をもつ。協力すること。勝ったり負けたりで

きること。

このように、保育領域についての内容だけを見ると、まるで、学校教育の下請けのように思えるかもしれませんが、実際の保育現場は、学校とはまったく違います。一番違うことは、幼稚園は、生活、遊びの中に学びがあるということです。

### 幼児の教育において必要な二つのこと

子どもの幼稚園生活において、子どもをせかせることはよくないことだといわれています。といつても、毎日の園生活の中で、昼食前の手洗いなど、〇〇しなければいけない時間というものは、必ずあります。そのような決まりごとについては、きっぱりと声かけをして、子どもに働きかけます。

しかし、保育者が意図的に準備した保育内容や、生活の中での学びについて、子どもたちが、この遊びは、もっと続けてやりたいとか、夢中になって観察したり、最後まで納得するまで話し合いをもったりするこ

となどについては、子どもが充分に活動できる時間と、静けさのある環境を保障できるように、心配りをします。学びが、子どもにとつての理想的な働きかけとなるためには、時間の余裕と、落ち着いた環境、この二つが不可欠だからです。そのために、キンダーガルトンでは、充分な自由遊びの時間がとられています。子どもが、いつまでも飽きずに、同じ遊びに取り組んでいたり、毎日毎日のはさみで切り紙遊びに夢中になりするような時にこそ、子どもの学ぶ力が育つているとわれわれ保育者は見ています。

子どもというものが、教育的働きかけを与えられる対象ではなくて、子どもが主体の遊びの中でこそ、教育的働きかけが、熟成していくのです。保育者は、気づきや学びについての提案、実験する環境などを準備し、きっかけはつくるけれども、あくまで子どもたちが主体となって、学んでいくことが、キンダーガルトンでの基本とされています。

(ロバート・ヘーガー通り幼稚園)